

# 古鎮 (Old Town) の都市化：明清時代の景德鎮の陶業

平成 26 年 5 月 7 日受付

李 為\*

## 要 旨

この調査報告は中国の古鎮の都市化および明清時代の景德鎮の陶業生産における陶磁生産と陶磁産業で結ばれた社会関係に関する現地調査のものである。特に明清時代の景德鎮の同郷仲間意識によって現れた古い生産様式および都市化との関連性について論じている。つまり、同郷仲間のようなセクショナリズムは古鎮 (Old Town) の都市化を阻むと共に市民意識を育成することができなかつただけではなく、むしろ封建変動への方向を導く強い勢力でもあったことが明らかである。

キーワード：古鎮，都市化，景德鎮，陶磁工業，社会調査

## 1. はじめに

今回の調査報告は2年間に亘る調査研究の2回目の調査報告である。昨年度はまず代表的な古鎮(景德鎮、烏鎮)の都市化と生活様式の変遷に関する関係資料の収集を鋭意進めるとともに、研究視点を構築し、古鎮の都市化と生活様式との相関関係に対する含意のあり方を検討した。今回は明清時代の景德鎮の陶業生産における成立年代およびその生産様式、官窯設立の目的、都市化との関連性とその独自の発展経路を、史料調査で追いつつ且つ景德鎮の都市化の展開と対照して、調査研究を進めてきた。

## 2. 明清以前の景德鎮の陶業

景德鎮の陶業生産はすでに唐の時代に逸品の生産をもって世にその名を知られ、宋の景德年間には景德鎮の陶業製品に「景德年製」の銘を底に入れたところ、陶製品の高台に銘のある製品に逸品が多かったことから産地を示す名称に成ったと言われている。明の洪武時代に入り、御廠設立によって官窯の創立された時期であることを、歴史学と考古学の資料から立証されている。もちろん、御廠設立以前には宋時代と元時代の生産システムに習い、景德鎮に対する陶業生産の需要は委託焼造の形で行われた。しかし、明の初期における陶磁品需要は永楽年間の鄭和の西洋経略を物語って、西洋諸国に対する輸出だけでも相当の数量であった筈であるから、それが明の初期すでに存在した均窯、定窯、磁州窯等、景德鎮の陶業に影響がなかったとは言えないだろう。すなわち、御廠設立以前の民間陶業

---

\* 京都産業大学経営学部

の焼成力には相当のものが存在したと見ても間違いはないだろう。もちろん、唐の時代から陶磁生産をもってその名を知られていたと言っても、文献にはっきりとした記録が残るようになるのは宋以降のことである。宋の時代では、とりわけ南宋の都である杭州を中心として、文化の中心南方に移り、南宋以降の北方の陶工がこの地に避難した結果、景德鎮の陶業は一段とその技術に磨き加わり、青磁の生産に特色を発揮するようになったという。元の時代に入ると、青磁から青色の染付が始まり、技術的にも改良が加えられたが、明に入ると実利実学の奨励によって、技術面の開拓は一段と進歩し、すでに赤絵という特色の技法を打ち出すことができた。その間にあって、技術面に対する創意工夫が加えられるだけでなく、顔料採用の地域も拡大され、これに対する研究や検討が重ねられることになる。しかし、景德鎮において陶磁の逸品を生産したことでは唐の仮玉器以来、宋と元と共に名品の生産でその名を知られた景德鎮の陶業は、明に入って量産を加え、御廠の設立に刺激されては生産規模も生産関係も陶業資本をめぐる資本関係も景德鎮の戸籍編成も一つの画期的転換期を迎えることになる。したがって、官窯創設という点から見ても、単に官の需要が民窯に対する委託製造から、官営工場にすべての生産を移転したというだけのことではなく、もっと複雑な関係において、社会的に、経済的に、文化的に、国際的に陶業生産を中核にして大きな転換期を迎えることになる。実際のところ、宋元以降の景德鎮は、しばらく陶業はシルクロードと西洋航海の発展路線に伴って、その商品の価値を認められた。世界市場にその名を知られはじめた景德鎮の陶業は、元末明初の社会の混乱と政治権力の交替期に当たり、農業生産力の後退をもたらし一度挫折したが、明初における農業奨励の政策が功を奏し、しばらく衣食の資が充足し、陶業の製品が円滑に流通する段階に入ると、景德鎮における陶磁生産はきわめて急速な展開を示したことは、容易に察知することができる。このことは景德鎮に官管轄の御器廠が設立されたことと関係している。これによって、官営陶業で生産された官の商品とし流通経路を拡大しつつあるのと同調して、閩ルートの流通も発達され、中国の商業資本の蓄積には不可欠の場であったことは、塩商の巨大な初期資本の蓄積の拠点が私塩の利益によったものと同様である。この視点から、官の陶業統括は思うように利益を掌握しにくい、民間に対する委託生産を一旦、官管轄の窯製造に切り換えたのも民官の窯製造に委ねては陶工や、商人の逸品抜き取り、官僚の中間収奪を防ぎ、少しでも陶磁生産と販売の利益を独占しようとしたことが御器廠の設立目的で、さらに世の中にすぐれた技術者を召募して地方や民間の資金を、景德鎮の御器廠を通じて国家権力が吸い上げる費用を景德鎮の周辺の地域にも及んだ。

### 3. 商業資本と都市化の問題点

磁器の都と称する景德鎮は、明の中期以降の陶磁生産はその生産過程の職種別の仲間結成の細分化によって、その横の連絡を、分業による協業が独特の形をとって運行されつつあると共に、その流通面における機能もまた、部分的請負制がよく発達しており、周辺地域の商人資本力を中心にきわめて広範な市場圏を獲得して、商品流通に大きな貢献を与えた。景德鎮の住民の十の七八は陶磁業の製造および陶磁販売で、農家は見出すべくもないに姿に変貌し、生活必需品は一切他所から運び込まれて

購買すれば事欠がね賑わいを示している。それに加えて、明末清初の景德鎮に滞在していたフランス耶蘇会宣教師ダントルゴール氏の「中国陶磁見聞録」をみると、景德鎮を概観した際、景德鎮の周辺には城壁がなく、都と呼べるものがないが、地域が广大で、商品の出入りに便利なところ、しかも人口密度の高い諸都市と肩を並ぶほどの大きな「鎮」である。ダントルゴール氏によれば、当時の景德鎮には一万八千世帯があって、裕福の商人たちの住居は広大の土地を占め、驚くほど多くの陶業職工が働いている。そして通説には人口百万あり、一日で消費した米は一万俵、豚は一千頭以上だったと述べていた。すなわち、当時の巨商は広大な屋敷を持ち、その中に陶窯を多く構え、数多くの職工を抱え、陶磁製造の窯元として、その製品の販売を行っていたことが知られるのである。

まず生産過程において、ある民窯の事例でみると、たとえば、同時的に三千件以上の製品を造り上げることが民窯焼成の満窯の条件なのであるから、三十人以上の製陶工匠がそれぞれの職域に分かれて働いており、分業による協業で製造が行われていた。この場合は資本形態から見ても既にマニュファクチュア段階に入っていると見て差し支えないことであろう。すなわち、明末清初には陶磁工業の一部が未だ手工業生産の段階に止まりながら、しばらく生産手段としてのマニュファクチュア化が実現されていたことが理解されるのである。しかし、このような大規模の生産者は依然として稀な存在であった。こうした豪商にしてもその流通経路をまだ完全には掌握しておらず、全国的な流通経路を占有していたのは徽州商人や蘇湖商品の商業資本に動かされ、陶磁産業のような産業資本の伸びきれない社会状況は、景德鎮のような新しく伸びだそうとする産業の合理化の発展を押さえ、伝統的勢力は根強い力を温存していたことが推察することができる。さらに民間の窯の大部分は古い共同出資形態をとってお金のある者は資金を出し、お金のない者は労働力を提供し、資金と労働力の合併をもって生産関係が維持される。このようにみると、社会経済は当然近代化されるにもかかわらず、いつも古い形に押し戻されている実態に突き当たり、古鎮の都市化もこのような社会背景に置かれていた。

このように、古鎮の都市化を阻止した要因とは何かという問題に触れざるを得なくなる。伝統的な共同体の村落内で育った人々には、利害を共にする者は同郷の出身者を頼る以外にはなかったのである。何時政権は転覆するかもしれない一向頼る足りない収奪者で一朝廷のことであれば、自分の生命や財産を保全する便となる者は同郷人が力を合わせ、侵略者を防ぎ止め、日常の食糧を守り抜く力を併せることのできるのと同じ地域に生きる同士の相互扶助の力である。それを信じて、異郷の地に行ってもなおさら同郷者が相率いて、競争相手に勝つための努力を惜しまなかったのである。したがって、南京工部の工匠として景德鎮に上番し、雇役工匠として景德鎮に住みついて、彼らは同郷出身者同士で頼り合い、何かあった場合、お互いに助け合う必要を認め、同郷仲間を固めたのである。しかし、同郷出身者相互以外を排除し、すべてにわたって同郷仲間を固めようとすることは社会発展の関連な運営と展開を推進する上には大きな障害となったのである。この点では、現在の中国の同郷仲間による腐敗問題において通じるところがある。

#### 4. 同郷意識の弊害

つまり景德鎮の都市化の表象である富裕層の人は客帮と呼ばれている人々である。この人たちは景德鎮の土著住民には累いでしかないのだと排斥的な態度を示されれば、その根底にある者は納税を共同負担しない者は仲間ではないという頑迷な同郷仲間主義のセクショナリズムの現れのようなものである。徽州商人と蘇湖商人が民窯製品の販路を掌握した事実は、商業資本に支配され、生産手段の革新を実現する産業資本の発展を阻害したことは確かである。しかし、重要な販路掌握者を客帮人として疎外し、景德鎮の害をなすものだときめつけて締め出し、単に疎外しようとする態度は決して景德鎮陶磁産業の生産を前向きに展開させる行き方とは考えられない。このような明清時代の景德鎮に依然として、人間のすべての仲間結集の中心をなした同郷仲間のセクショナリズムは景德鎮の陶磁産業をめぐる社会関係で、景德鎮の住民をばらばらに対立させ、景德鎮の都市化を阻むと共に市民意識を育成することができなかつただけではなく、むしろ封建変動への方向を導く強い勢力でもあった。

#### 5. まとめ

二年間の現地調査を通し、以上の報告にわたって、今回の報告は明清時代の景德鎮における生産関係を検討することで、景德鎮の都市化は陶磁生産と深くかかわって、農業と手工業が未分離の形を留め、陶磁生産業は農民の副業的段階にあって、それを反映した社会関係によって規定されていることが明らかになった。現地調査において多くの方と接する機会が得られ、現在の景德鎮の都市化に照らして考えても多くの示唆が得られた。しかし、詳細の分析とデータ解析はまだ途中であり、今後、順次に論文で発表していく予定である。

# Urbanization of Old Town in China: Ceramic Industry at a Town Jingdezhen in the Ming-Ching Dynasty

Wei LEE

## Abstract

In this report, reports the results of the basic research and study on how the Urbanization of Old Town in China, and what guild structure the ceramic merchant had at Old Town Jindezhen in the Ming-ching Dynasty of China. The origin of ceramic industry at Jingdezhen is of course very old, and concerning its primitive state, the only thing can safely be said is that it assumed the character of local and domestic industry and urbanization of old town in China.

**Keywords :** Old Town, Urbanization, Jingdezhen, Ceramics Industry, Social research

